『日本語学論集』第4号　2008年3月

近代日本語資料としての『日韓韓日新会話』

成　玧 姸

0．はじめに

近代日本語の資料は膨大で，まだ開拓の余地のある資料群が多く存在する。その資料群の中に，朝鮮語会話書[1] がある。朝鮮語会話書は日本人のための会話書であるため，話しことばを基調とした，日本人の手による口語資料である。しかし，明治期における朝鮮語会話書の研究は，梶井（1978）・桜井（1974）・山田(2004）の研究など，いずれも書誌学的性格の強いもので，日本語研究のための活用はほとんどされていないのが実情である。

これから朝鮮語会話書を近代日本語の資料として活用するためには，書目の整理や特徴の調査などの諸本の検討作業およびより多くの朝鮮語会話書の特徴や日本語の実態を把握することが必要である。そこで，本稿では，多くの会話書の出版に手がけた島井浩により明治 39 年(1906）に刊行された，朝鮮語会話書であると同時に，朝鮮人のための日本語会話書でもある『日韓韓日新会話』をその対象とし，書誌の概要・語彙・会話の内容および日本語と島井が著述した会話書との関係について言及する。また，対訳の性格や五十音図のハングル表記についても考察を行う。

1．書誌の概要

明治 39 年に刊行された『日韓韓日新会話』は，「本書ハ日人ノ韓語ヲ学ヒ韓人ノ日語ヲ学ブノ階梯トスル目的ヲ以テ編纂シタレバ」[2] と述べているように，日本人のための朝鮮語会話書であると同時に，朝鮮人のための日本語会話書でもあるため，編者である島井浩は本書の編纂の対象を朝鮮人や日本人の両国の人とし，序文の代わりに掲出した「注意」書きを朝鮮語と日本語の両国語で記している。

また「五十音ハ日語ノ基礎諺文ハ韓語ノ根源ナレハ開巻第一ニ之ヲ掲ケタリ」という方針により「五十音図」・「伊呂波」続いて「韓国諺文」[3]（ハングル）が示されており，ここで，島井は「外国語を学ぶ際には、とりあえず文字を熟知し、文法を勉強してこそ翻訳ができ、その国の書物や手紙，そして事情もわかるようになる。音だけを頼りにして身につければ、意思疎通はできるとしても、ぞんざいな言い方になりがちで、聞き取

れないところもあるはずなので、最初から日本仮名をよく熟知しておくべきである」(筆者訳) と，文字と文法による外国語学習の重要性について力説している。

その文法について，「文法ヲ初学者ニ説クハ殆ド無用ノ労タルベキヲ信ジ之ヲ省ケリ故ニ韓語ノ文法ヲ味ハントナラハ実用韓語学ヲ閲セラレンコトヲ希望ス」と文法が初学者には無駄であるため省くと述べながらも，実際には，次のように「語尾変化」や「助詞比較」，そして「副詞・形容詞・代名詞」の品詞別の単語や用例などを掲出している。

「語尾変化」(pp. 10～16)

往　ユク　간다 (カンダ)[*4]　　ユキマス　가오 (カオ)
往　ユコウ　가깃다 (カーケツタ)　ユキマセウ　가깃소 (カーケツソ)
往　ユキタダロウ　가깃다 (カツケツタ)
往　オユキ下サイ　가시요 (カシヨ)　ユキナサイ　가거라 (カカラ)
往　ユクカ　가느냐 (カヌニヤ)　オユキデスカ　가시오닛가 (カシオニツカ)

「助詞比較」(pp. 17～23)

犬
イヌガ　개가 (ケカ)　　木葉
コノハハ　나무닙흔 (ナムイププン)
イエニ　집에 (チーペ) 又의　タレソレニ　아무게흔디 (アムケハンテ)
コクモツヲ　곡식을 (コクシークル)　サケデ　술노 (スルロ)
ウエヨリ　우흐로 (ウフロ)　トーキヨーニ동경으로 (トンギヨーグロ)
ミチニテ　길에셔 (キーレソ)　アノヒトトコ사룸흔고 (クーサラムハコ)
アスカラ　닉일부터 (ネイルブット)　ユエニ　연고로 (ヨンゴロ)
ラバ　면 (ミヨン)　カラ　니 (ニ)　トテ　들 (ツル)　ツツ며 (ミヨ)

つまり，「語尾変化」の項では，動詞の語尾の活用の事例を，「助詞比較」では主格・目的格・場所・仮定などの様々助詞の用法などについて，簡単な解説と用例を示している。[*5] 上の基礎的文法の学習に続いて，会話と語彙を交互に掲出している。このような構成は，その学習効果を念頭に入れたものであろう。

それまでの朝鮮語会話書は，比較的短いやり取りの問答が主であったのに対し，本書の会話は，多様なテーマに沿って対話が自然に進行する形式をとっていて，会話書としては発展した形であるといえる。

次いで，本書の序文について述べる。本書の朝鮮語の校閲にも携わった忠清道の文官である成斗植[*6]が序文を寄せており，「日韓両邦境域接連国交頻繁商販相属苟非胥方言窒碍不尠況茲者交際益密関係影響尤倍昔比言語要領詎非目下之急先也耶」と両国の言語学習の必要性を強調し，島井の功績を称えている。その内容は下記に記す。

在釜山島井浩氏奮然于此嘗著成日韓会話実用韓語学二局(ママ)庸資講肄(ママ)之程多有稗益継而重輯是編上自乾象暨坤倪草木昆虫之物人事日用常行云為以其国文更互発繹凡厥彙類尤極広大靡不悉備学語捷径交隣折衷未有若是之詳且尽者苟能実力研究不特寘諸荘嶽(ママ)之効已島井浩氏之功曷可少哉凡吾同志宜丞勉旃(ママ)

2．著者「島井浩」について

島井浩は，対馬旧厳原の藩士で，明治16年以来釜山に居住し，明治21年釜山朝鮮語学所に学び，のち共立釜山商家学校，釜山第一公立小学校の教員を歴任した。昭和10年３月２日，69才で没した。本文の始めに本書の内題が示され，その下に著者の名前とともに「在釜山」とあり，出版当時釜山に在留していたことがわかる。本書の他にも，次のように多くの朝鮮語会話書や朝鮮人のための日本語会話書を出版しており，金水苔水[*7]とともに，明治後期における代表的な朝鮮語の普及者といえよう。島井は，本書以外に1902年から1918年の16年間にかけて6冊[*8]も朝鮮語会話書や日本語会話書の編纂に携わるなど、両国の架け橋の役割を果たした。

次は，明治期における島井の朝鮮語関連の著作・発行年・発行所・大きさ・所蔵場所を表にしたものである。所蔵場所については，筆者が直接確認できたもののみ挙げた。

書名	発行年	発行所	大きさ	所蔵場所
実用韓語学	明治35 (1902)	誠之堂書店	2, 4, 4, 210pp 19cm 朝鮮地図1枚	国会(初版) 大阪府立(初版) 阪大(5版明治38) 東大(７版明治39)
実用日韓会話独学	明治38 (1905)	東京 誠之堂	165pp 19cm	国会・大阪府立・東経大・阪大・大府中央
日韓韓日新会話	明治39 (1906)	東京 青木嵩山堂	255pp 16cm	国会・東経大
韓語五十日間独修	明治42 (1910)	大阪 青木嵩山堂	272pp 16cm	国会・大阪府立
日語会話	明治42 (1910)	記載なし	197pp 16cm	国会

上の会話書のうち，『実用韓語学』（以下，『韓語学』）・『韓語五十日間独修』（以下，『五十日間』）は，日本人のための朝鮮語会話書で，『実用日韓会話独学』[*9]（以下，『独学』）・『日韓韓日新会話』（以下，『新会話』）は日韓両国の人のための会話書であり，『日語会話』は朝鮮人のための日本語会話書として作られたものである。この時期まで，日

本人の大陸進出のための朝鮮語会話書は多く出版されていたものの，朝鮮人のための日本語学習書がなかったため，多くの朝鮮の人が日本語の学習書を求めていることを知り，島井は両国の人のための双方向の会話書の編纂を手がけることになったという。[10]

『実用日韓会話独学』には，７版まで出版された『実用韓語学』の広告が載せられているが，そこには島井が正確な朝鮮語学習書が編纂できる朝鮮語に最も詳しい人物であると紹介している。

> 朝鮮会話及文法　**実用韓語学**　前釜山領事　能勢辰五郎君序・京城李冕植・陳熙星、趙熙舜　三氏校閲　訂正五版紙数二百余頁　正価　金五拾銭
> 日露開戦し日韓協約成て韓語の必要益々迫れり時に未だ完全正確なる朝鮮語研究の書に乏し本書は多年韓国に在て実用韓語に最も通暁せられし島井浩氏の著にして殊に韓国三大家の厳密なる校正を経たるものなれば出征の士軍属及事業渡韓者は固より時局に鑑み韓語を解せんと欲する士は須要欠く可からざる良書なり

『韓語学』の出版されてから３年後には，比較的簡単な会話の用例集ともいえる『独学』が，その翌年の明治 39 年には，この『新会話』が出版される。また，その３年後の明治 41 年には，一日ずつ分けて 50 日でマスターできるよう構成された『五十日間』と朝鮮人のための『日語会話』が出版されるに至る。

３．『日韓韓日新会話』の語彙

本書は日常必要とする語彙を集め，単語・会話が交互に練習できるよう構成されている。会話の本文に用いられた語彙を中心として，単語部に記している。つまり，単語は下にあげた目次のように，部立てをし，会話と関連性のある部の単語や近似したいくつかの部門をまとめて会話と会話の間に挿入しているのである。

> 日本仮名・以呂波・韓国諺文・語尾変化・助詞比較・短語（組織）・単語（副詞、形容詞等）・会話１・単語（代名詞、人倫、時期）・会話２・単語（旅行、宇宙、家宅、飲食）・会話３・単語（商業、衣服、織物、職業、器具）・会話４・単語（身体、疾病、家具）・会話５・単語（文芸、遊技、武事、官位、地名）・会話６・単語（鳥類、獣類、虫類、魚類、穀物、野菜、草木、果花、金宝）・会話７・単語（数、分数、倍数、順数、通貨、利率、尺度、斗量、権衡）、会話８、単語（単位、年、月、日、時）

明治20年代までの大部分の朝鮮語会話書における部立ては，江戸時代の『交隣須知』の系統を引きながらも，「貿易」や「鉄道」「文明」のように，時代に合う新たな部を付け加えているのが特徴であるが[*11]，本書の語彙における部立ても同様である。このような部立ての傾向は，島井の他の会話書である，『韓語学』や『独学』，『五十日間』でも見られる。[*12] その目次を摘記しておく。

鉄道・貿易品・身体・国土及都邑・国名及地名・商業・職業・旅行・家宅・家具並用品・人族・時期・宇宙・文芸及遊技・飲食・衣服・草木果実・鳥類・水族・獣類・昆虫類・政治・官位　　（『実用韓語学』）

日本仮名・韓国諺文・単語（俗称基数・音称基数・分数・倍数・順数・通貨・利率・尺度・斗量・権衡・単位称・年称・月称・日称・時称・身体・疾病・飲食・衣服・織物・家宅・家具・器具・職業・商業・文芸遊技・武器・旅行・政事・官位・鳥類・獣類・虫類・魚類・魚貝・金属宝物・穀類・野菜・草木・果花・薬材・星辰・地理・時期・色彩・地名・人族）◎会話（短話）◎会話（問答）◎会話（組立）　　（『実用日韓会話独学』）

数・音称・分数・倍数・順数・旧貨・新貨・利率・尺度・斗量・権衡・単位称・年称・月称・日称・時称・時期・人族・身体・飲食・家宅・家具・職業・商業・旅行・文芸遊技・鳥類・虫類・魚貝・金石宝物・穀類・野菜・草木・果花・自然　　（『韓語五十日間独修』）

4つ会話書の目録を比較してみると，島井の会話書の語彙における部立ては，いずれも類似していることが明らかである。『新会話』の土台になったとみられる『独学』と比べてみたら，「色彩」がなくなり，「星辰・地理」が「宇宙」になり，「人族」が「人倫」に変わるだけで，ほぼ一致している。

しかし，収録された語彙の内容を調べてみると，「通貨」の項目で，文（モン）문(닙)・貫（クワン）냥（『実用』p.10）の旧通貨が新通貨である厘（リン）니・銭（ゼニ）젼・圓（エン）원（『新会話』p.225）に入れ替えられたり，「武事」では，「정장　正将　タイシヨウ　부장　副将　チウシヨウ　참장 参将　セイシヨウ 정녕　正領　タイサ　부령　副領　チウサ 참령　参領　セウサ」（実用44・官位）のように，朝鮮語に合わせて漢字を使いそこに日本の振り仮名を付けていたのを，「大将・中将・少将・大佐・中佐・少佐」（新会話・会話・172）と日本式に換えた例も見受けられる。

戦争が終わって間もないためか，「兵士（ヘイシ）　大砲（タイホー）　銃（ジウ）　祝砲（シュクホー）　ピストル　戦争（センソー）　軍艦（グンカン）　甲鉄船（コーテツセン）　援兵（エンペイ）　和睦（ワボク）」のような用語もみられる。「地名」では，『実用』では65

語のうち，朝鮮の地名が37語と半分以上を占めていたが，『新会話』では，12語に大幅に減り，「日本・東京・西京」と３語に過ぎなかった日本の地名が「日本・東京・京都・大阪・横浜・神戸・長崎・門司」８語に増える。これは，朝鮮や朝鮮語を優先していた『独学』に対して，『新会話』は何らかの政治的な背景により，日本や日本語を優先視するようになったことを物語っているのではなかろうか。[*13] こういった意識は，『独学』がハングルを上に，その下に片仮名で日本語の対訳を付けている反面，『新会話』の場合は，日本語を上段に，そのハングルの対訳を下段に示しているなどの体裁とも関連づけて考えられる。

その他，『独学』の「刀・ヨロイ・カブト」がなくなり，『新会話』には，「祝砲シユクホー・ピストル」になり，『独学』の「진시（チンシ）辰時・오시（オシ）午時（ウマノトキ）」が除かれ，『新会話』では，「一時～十二時」に統一されるなど，新旧交替の意識により替えられたりなくなる例も見受けられる。つまり，部立ては類似しても，収録語彙は，当時の情勢や必要に応じて収録する語彙の内容が異なるなど，再編集が行われる。本書に収録された語彙の例を掲げよう。[*14]

①数字[*15]：ミツ　ヨツ　ムツ　ヤツ　三十四（サンジウシ）　五十（ゴジウ）　七千（シチセン）　四分ノ一（シブン　イチ）　十分（ジツブン）
②四つ仮名：頭痛（ヅツー）　ムヅカシイ
③合拗音：正月（ショーグワツ）　看護（クワンゴ）　宴会（エンクワイ）　菓子（クワシ）　花瓶（クワビン）
④長音：一丈（イチジヨー）　醤油（ショーユ）　小説（ショーセツ）　舅（シウト）　姑（シウトメ）　十二日（ジウニンチ）
⑤外来語：ステツキ[*16]　コレラ　ランプ　ストーブ　コンロ　ポンプ　ピストル
⑥その他：朝飯（アサハン）　昼飯（ヒルハン）　半年（はんねん）　頭髪（カミゲ）　犬児（イヌノコ）　牛児（ウシノコ）　七日（ナヌカ）　木槿（モクゲ）
弟（オトト）　妹（イモト）　貨物（クワブツ）　牛皮（ウシカワ）　競走（ハシリツコ）　ドビッコ
角力（スモー）　驢馬（ウサギウマ）　玉蜀黍（トーキビ）　臍（ホゾ）　クサミ　厨（クリヤ）　蝿（ハイ）
一日（イチニチ・ヒトヒ）　毎日（マイニチ（ニチニチ））　毎月（マイゲツ（ツキツキ））　今月（コンゲツ（コンツキ））
毎年（マイネン・マイトシ）

振り仮名がついており，当時における漢字の読みや長音の表記・イ段長音の表記，外来語の増加などがわかる。「仮名遣ハ成ルベク実際ノ言語ニ近キモノヲ取レリ故ニ文学の立論トハ大ニ趣ヲ異ニス之レ文学ト語学ノ路異ルニ因ル」という記述にもあるように，当時の言語を反映している資料として見なしていいものと考えられる。

4．『日韓韓日会話』における会話

会話は同じフレーズを反覆して示す「短語」といくつかの場面や話題を想定して行われるダイアローグ形式の会話が「会話一」から「会話八」まで９つある。各会話とも，

日本語を上段に，朝鮮語訳を下段に掲げている。表記は，語彙同様，漢字交じり片仮名文で，すべての漢字の傍らには，片仮名でその読方を振ってあり，文節の切れ目に読点をつけているなど，朝鮮人自ら独習できるよう工夫されている。[17]

その内容と日本語がどのようなものかを見るために，短話から会話八までの内容についての解説と会話の一部分を次に引用する。

＜短話＞会話用の簡単で短い文章で，23ページから48ページまで，172文が掲載されている。同じ表現を反覆して示している。このような語句の反覆練習に関しては，「本書ハ成ルヘク系統的ニ実地的ニ組織スルコトヲ務メタリト雖モ反覆習熟セサレハ其妙味ヲ知リ難ケレハ読者ハ此点ニ十分ノ注意アランコトヲ乞ウ」と，その重要性を語っている。

ソウ、なさる、ツモリデスカ　그리ᄒᆞ실터이오　クリハシルトイヨ
モチロン、ソウデス　아무렴 그럿치오 アムリヨムクロツチヨ
ドコニ行(ユカ)レル、ツモリデスカ　어듸가실터이오　オテカシルトイヨ
ニホンニ、行(ユク)ツモリデス　일본갈터이오　イルポンカルトイヨ
ドウナサルツモリデスカ　엇지ᄒᆞ실터이오　オツチハシルトイヨ
断然ヤメルツモリデス　결싼고아니 홀터이오　キヨルタンコアニハルトイヨ

ツヽシマネバナリマセヌ　조심ᄒᆞ여야ᄒᆞ지　チヨーシムイハヨヤハチ
ドウデ、見ナクチヤナリマセヌ 긔혀이가야ᄒᆞ깃슴늬다 キヒヨイカヤハケツスムニダ
聞テミナクチヤナラナイ　미샹불보아야ᄒᆞ깃지요 ミサグプルポワヤハケツチヨ

＜会話一＞日本人と朝鮮人が初対面する場面を想定した会話で，57ページから76ページの19ページである。名前から年・両親や兄弟などの家族事項・住んでいる場所そしてお互いの語学の実力や勉強・日本にいく方法や日本の軍隊・日露戦争勃発の原因[18]や情勢にまで，多岐にわたる話題の会話が交わされる。

御挨拶(ゴアイサツ)、イタシマス
ハジメテ御目(オメ)ニカヽリマス
ドナタ様(サマ)デスカ
私(ワタクシ)　ワ金孝道(キンコード)ト申シマス
私(ワタクシ)　ワ東郷(ドーゴー)デス
才年(トシ)ハ才幾(イク)ツデスカ
年(トシ)ハ満二十才(マンニジツサイ)ニナリマス

ドーネン　ゴザ
ソンナラ、同 年デムリマス

ワタクシ　クニ　コトバ　タイヘン　ジョーズ
アナタハ、 私 ノ国ノ 語 ガ大 変オ上 手デス、ネー
ワズカ　アイサツクライ　イタシ
僅 ニ、ゴ挨 拶 位 ヲ 致 マス
タダイマ　ゴガク　シユギヨー
只 今でも語学ノ修　業ヲ、ナサイマスカ
ニチニチベンキヨー
日 々勉　強シテキマス

シユルイ　オ　ヽ
軍艦モ 種類 ガ 多 イデスカ
セントーカン　ジユンヨー　カイボー　ホー
戦 戰 艦、 巡洋艦、海防艦、砲艦イロイロアリマス
オモイ
私モソーダロート思　マシタ
ニチロ　センソー　サクコンイカガ
日魯ノ 戦争 ハ 昨今 如何ニナリマシタカ
リクヘー　ホーテン　コエ　スヽ
陸兵 ハ 奉天 ヲ越テ進ミマシタ

海軍ハ波羅的艦隊ガ全滅シマシタ

ソンナラ、日本ガ大勝デスネ　p. 71

ヨ　ヤスミ
夜ガ、フケマシタカラ、オ 息 ナサイ
カエリ
オ 帰 デスカ

左様ナラ
ヒマ　セツ　アソビ　イラ
オ暇ノ節、オ 遊 ニ入ツシヤイ
キンジツマタ　メ　カヽリ
近日又 オ目ニ 掛 マショー

＜会話二＞83ページから102ページまでで，朝鮮から日本に行く旅程において，行く道，手段，宿屋と各場面を分け，場面別の会話例とともに必要とされる会話の用例を提示している。

キシヤ　ナンジ　デ
汽車ガ何時ニ出マスカ
アサ　シチジ
朝ノ七時ダト云マス
ステーション　アユミ
停車場 迄ハオ 歩 デスカ
アメ　フル　アユ
雨ガ降カラ歩マレナイデス
オーライ　ナンギ
往来 ガ難義デス

デンポー　キ
ドコカラ、 電報 ガ来マシタカ
トーキヨー
東京 カラ来マシタ
ユカ　イデ
アス往 レテ、イツオ出ニナリマスカ
イツ　ワカ
往 テ見ナクチヤ分ラナイデス

った言い方をしている。また，自然な会話を表わすためか終助詞を用いる場合もすくなくない。

補助動詞前の形容詞や動詞「問ウ」にウ音便を用いており，格助詞「ハ」を「ワ」で表記したところもある。文末には「デス」が多く，場合によっては「デゴザリマス」もみうけられるが，「デアリマス」はほとんど見られない。また，命令形は，五段動詞はエ段で終わり，上下一段動詞は「ロ」をつけている。その外の命令表現には，「オ＋連用形」「～テ（オ）クレ」「～テクダサイ」「動詞連用形＋ナサイ」などが用いられる。

尊敬表現は「オ～ニナル」「オ～ナサル」「～ナサル」「～レル」および「イラツシヤル」「ゴランニナル」などの尊敬語が用いられる。また，形式名詞の使用について不自然さを感じさせる文章もみられる。[*19]

内容の面からみれば，初対面の挨拶から始める日常生活に関わる会話から商業・売買・人との交際・召使いに下す命令表現・電報や汽車などの新文明に関する話・人とのトラブルと関連した対話，そして，戦争勃発の原因や戦争当時の情勢など，かなりバリエーションがある。[*20]

本書における会話の内容および文章は，『韓語学』や『独学』のものと類似している。下に挙げておく。

平安ニ御息ミナサイマシタカ（『韓語学』p.176）[*21]
私ハ病気デ数日臥シテ居マス（『韓語学』p.176）
前カラ拝顔ハ致シマシタガ初テ御挨拶イタシマス（『韓語学』p.177）
アナタハ御両親ガ皆御有リナサイマスカ（『韓語学』p.181）
御兄弟ガ皆デ御何人デゴザイマスカ（『韓語学』p.181）
商売スル心ハ有テモ資本ガナク誰モ資本ヲ貸ス人モナイカラ職業ナシデ大君ノ事ハ段々相談シテ及ブ丈ケ御周旋致シマセウ（『韓語学』p.181）
他人ニ欺カレネハヨク売レルノデスカラ御任セナサレテ私ニ資本ヲ貸サレルナラバ何万圓位下サレル積デスカ（『韓語学』p.181）
万一貴君ガ私ヲ思テ資本ヲ貸サレテ商売スル様ニナレバ御恩ハ死テモワスレマセヌ（『韓語学』p.189）

朝飯（アサハン）、食（タ）べマシタ（『独学』p.67）
吾々（ワレワレ）ハ昼飯（ヒルハン）ヲ食べマシタ（『独学』p. 67）
アノ人（ヒト）タチハ、晩飯（バンメシタ）食べマシタ（『独学』p. 67）
茲（ココ）ニ御出（イデ）。（『独学』p. 71）
早クオ歩（アユ）ミナサイ（『独学』p. 72）
私ハ大層（タイソウ）忙敷（イソガシウ）ムリマス（『独学』p. 76）

例と召し使いなどに対する動詞の命令形の使用が目につく。

ギヤク　スージツヒキコモツ
瘧デ数日　引篭テヰマス
キブン　イカガ
ゴ気分ハ如何デスカ
ヒヤクジミリヨー
百事無聊デス
ナニ　クスリ　メシ
何ノ薬ヲ召マスカ
キナエン　スコ　タベ
幾那塩ヲ小シ食マシタ
イチリヨージツウチ　ゼンクワイ
一両日内ニ全快致マセウ

コーカツ　キツネ　ヨー
狡猾ナルコト狐ノ様デス
ウワサ　マル　オナジ
噂ト丸デ同デス
シンタイキワ
進退谷マルデス
ヒト　ウケヤワ
独リデハ受合レナイデス
チカラ　オヨ　ダケ　シウセン
力ノ及ブ丈ゴ周旋シマス
イカヨー　イタシカタ
如何様ニモ致方ガナイデス

カオ　アラ
顔ヲ洗エ

火ヲ、ケシテ、ネロ
ヨ
ソレデ止セ
センタク　キモノ　ンリ
洗濯シタ衣ニ糊ヲセロ（ママ）

＜会話五＞天気の話，宿のこと，そして関連性がない様々の文章が並べられている。151ページから167ページまでである。

カゼ　ヒヤ　キモチ
風ガ冷ツイテ、ヨイ気持デス

アツサヲ、ヨケラレマス
ハナ　ミナ
花ガ皆サキマシタ
クワビン
花瓶ニサセ
ハナ
花ヲゴランナサイ
イロ　クラ
色ハ比ベモノガナイデス

ヤド
オ宿ハ、ドチラデスカ
ノミ　トコムシ　ハイ　オヽ　タエ
アノ家デスガ、蚤、床虫、蝿ガ多クテ堪ラレナイデス
シラミ　ハイ　カ　オカ　ネム
虱ガ、クート、カユクツテ、蝿ガ、トマレバ、コソバユク、蚊ガ侵セバ眠ラレナイデ
ヨクジツ
翌日大変ツカレマス

意外(イグワイ) ニ 好消息(ヨイタヨリ) ガ来マシタ

雨ガ頻ニ降ナクチヤイケナイデス

奇特(キドク)ナ子供(コドモ)ダ

ヨク、オ世話(セワ)シテ 上(アゲ)ロ

＜会話六＞新年の挨拶から始まり，住居や気候に関する会話，仕事や買い物・訪問・赴任の挨拶，公務などの会話例である。174ページから194ページまでの20ページで，文章の長さは前の会話文より多少長くなっている。

冬(フユ)ハ、温突(オンドル) ガ、ヨーム(ゴザ)リマス

貴国(キコク)ノ方(カタ)ハ冬(フユ)デモ 朝鮮家(チョーセンイエ) ハ住(スミ)ニクイデシヨ

田舎(イナカ)ノ人(ヒト)、京城(ケイジョー) ノ人(ヒト)、話(ハナシ) テ見(ミ)ルニ、ドーモ違(チガ)イマスネ

ソレハ其筈(ソノハズ) デス、耳(ミミ)ニ聞(キク)コトモ目(メ)ニ見(ミ)ルコトモ違(チガイ) マスネ

茲(コ)ニ住(スマツ) テヰテ、京城(ケイジョー) ニ上(ノボリ) マスト、不慣(フナレ)デ、丸(マル)デ、イケナイデス

引続(ヒキツヅ)キ、ゴ平安(ヘイアン) デスカ

私ハ無事(ブジ)デスガ、遠路(エンロ)ゴ大儀(タイギ)デシタ

来(コ)ネバ、ナラナイコトデスカラ何トモ思(オモ)ハナイデス

私モ大層待(タイソウマチ) マシタ

オ待(ゾン)ダトハ、存ジマシタガ、足(アシ)ノ病(ヤマイ) デ、オクレマシタ

左様(サヨー)デシタカ、ゴ難義(ナンギ)ナサイマシタデシヨー

今日ハ、疲(ツカレ) マシタデ宿(ヤド)ニ行キマス

ハイ、治療(チリョー) ヲ十分(ジウブン) ナサイマセ

＜会話七＞205ページから222ページが会話七。久し振りに対面した２人の会話である。手紙や電報などによる便りの話題，京釜鉄道の建設に関する話，借金を返さないで行方をくらました人の行方を聞くなどのユニークなやり取りが収録されている。

京城ニ消息(タヨリ)ヲ、セネバ、ナラヌガ、書面(ショメン) ヲ郵便(ユービン) ニ出ソーカ電報(デンポー) ヲ掛(カケ)ヨーカ

急(イソ)ガナイナラ、手紙ニナサイネー

ソンナニ、急カナイコトダガラ書状(ショジョー) ニシマシヨー

此手紙ヲ郵便箱(ポコ)ニ入(イレ)テオケ

テツドー フセツ ザイリョク カヽル ジンリョク ヒゾヨー
鉄道ヲ敷設スルニ 財力 ガ大変ニ 掛 ノミナラズ 人力 ガ 非上ナモノデス
ミチ シク タカ トコロ ホリサゲ ヘイタン ヒク トコロ ウメタテ センリ
道ヲナラシツヽ鉄道敷ニ高イ 所 ハ 掘下 テ 平坦 ニシ低イ 所 ハ 埋立 テ千里
ミチ シキユク イチニネン オハ デキ ゴネン カヽル
ノ道ヲ 敷行 ノダカラ 一二 年ハ終ルコトガ出来ズ五年ハ 掛 ソーデス
シタ ウガチ ツクリ
高イ山ハ、下ヲ 穿 テ道ヲ 作 マス
クズル
ソンナニシテ、山ガ 崩 レバドーシマスカ
クズレ ザイモク アーチガタ サヽエ
ソレダカラ 崩 ナイ様ニ、材木 ニテ 虹霓門ヲ作リ支撑ルノダソーデス

メンドー アノ イツ トヒアハセ
モシモシ、ゴ 面倒 デスガ、彼人ノ住タ所ヲ 問合 テ下サランカ
ムツカシク ヨージ オヽ ユク
問合スコトハ、六ケ敷ナイデスケレトモ、用事ガ多クテ往ヒマガナイデス
コンニチ イソガシ アス かならず
今日 ハオ 忙 クテ出来ナイナラ明日ハ 必 聞テ下サイ
アス ヒマ タジツキイ
明日モ暇ガ有マセヌカラ、他日聞テ来マス
ナン ユーユークワンクワン ユカ
何タル、オ話デスカ、ソンナニ 悠々緩々 トシタコトデハ行カナイカラ
サツソクキヽアワ
早速 聞合 シテ下サイ

＜会話八＞229ページから249ページまでで，生活についての不安から，商売のための資本金についての話し合いが載っている。

コンニチ ジンジョー イシヨク ケネン コンナン
今日デハ、 尋常 ニシテキテ衣食ノ掛念ヲセズ、ヨク暮スコトハ困難デス
ソレダケ タイガイ クツ キ チジン アヒダ ケイリョーサウモン
夫丈デショーカ、大概ノ人ハ、食テ着テ、知人ノ 間 ニ 慶弔相問 ス
ルコトガ困難デス
シゾカ アソン バカ オラ シゴト ハジ ラン
ソレダカラ、 静 ニ 遊 デ計リ居ズシテ、仕事ヲ始メテゴ覧ナサイネー
ソノカンガヘ ナイ ダイイチ ナイ イタシカタ
其考 ハ無デハ有マセンケレトモ、第一 アレガ無カラ 致方 ガ有マセヌ
アレトハ、何ノコトデスカ
マルイ
アレトハ外デ有マセヌ、 円 モノデス
マルイ ナン ハジメ キ コトバ
円 モノトハ何デス 初 テ聞ク 語 デスネ
カネ マルイモノ イヽ カネ マルク
金ヲ 円物 ト云マス、金ガ 円 ナイデスカ

マチガツ コヽロ チガイ
間違タ、オ話デハ、ナイデスガ、私ノ 意 トハ 違 マス
チゴー タゲン ヨー ハダンイタシ
違 ナラ多言ヲ要セズ、破談 致 マシヨ
スージツソーダン
破談ハ致マスケレドモ、吾々 数日 相談 シテルノダカラ、外ニ借ル所ハ無
デスカ
ラン グワイコク ウチ トモダチ ロシヤジン ホカ
考テゴ覧、 外国 ノ中ニモ、私ハ外国友達 ハ魯士亜人ノ外ニナイデス

『日韓韓日新会話』における日本語は，上の引用からも窺われるように，召し使いなどに対しての会話の用例文などの一部分を除いては，大体が敬体で，かなり丁寧で改ま

ツーベン
通弁 ヨンデコイ
イツカヂ
何日路デアルノカ
ハンダイ　トー　ミ
飯代 ヲ 問テ見ロ
ヤス　　イツ
休(ママ) デ ープクヤリマシヨー
マダノボ　エ
未上 リ得ナイデス
モン　アケタテ
門ヲ 開閉 スルナ
イヌ　ホエル　　ダレ　キ
犬ガ 吠 カラ 誰カ来タワイ
シタ　サキ
舌ノ 先ガ、ヒリツクデス
ヒモジ　　タクサンタベ
飢 イノデ 沢山食 マシタ

＜会話三＞ 主に商売に関する会話である。商売の勧めから利益の分配・金を借りる場面，借金を返す場面，商売などにおける会話の事例や必要なセンテンスが記されている。109ページから120ページまでである。

ショーバイ　ケーキ
商売 ノ景気ハドーデスカ
ベツ　リエキ　アガ
別ニ利益ガ上ラナイデス
利益ガ上リソーデス
ゴードー
合同 デヤッテ見マシヨー

カネカス　　シンパイ
金貸 ノハ 心配 デス
スコシ
少 モ心配ナサルナ
ユーズー
融通 シテ下サイ
サイソク
ソンナニ 催促 ナサルナ

キミ　ギンコーセツリツ　　ホネオリ
君ハ 銀行設立 ニオ 骨折 ダソーデスネ
ミョー　ウワザ
妙 ナ 噂 ガタチマシタ
ダイシホン　アリ
ドーシテ 大資本 ガ 有 マシヨーカ

マエドリ
前取 ナサイマセ
ヒキオトシ
引落 マシタカ
ワタシコシ
渡越 ニナリマシタ
カイサイ
皆済 ニナリマシタ

＜会話四＞127ページから144ページにかけて病気やお見舞い・人とのトラブルの会話

雨ガ降ソウデス（『独学』p. 86）
我　国ハ 温突 カ 有マスカラ冬ハ凌ガレマス（『独学』p. 103）

つまり，島井は，『新会話』[*22]より先に発行された『韓語学』と『独学』の文章や内容などを参考にして『新会話』を構成したものと推察される。また，『新会話』も後に出版された『五十日間』[*23]に影響を及ぼしている。

昨夜ハ蚤ガ多クテ 夜明迄眠 ラレナイデシタ（『五十日間』p. 88）
事情 ガソウデスカラ出来ル丈 周旋 シテ下サイ（『五十日間』p. 88）
言葉ヲ飾テ、ドンナニ云タトテ 私 ガオ前ニ欺カレ様カ（『五十日間』p. 105）
急梅ガ注グ様ニ降ル雨具ヲ出シテ来イ『五十日間』p. 105
忙 シクテ 今日 ハ出来ナイデモ 明日 ハ 必 ズ問テ下サイ（『五十日間』p. 111）
此手紙ニ切手ヲ一ツヅヽ附テ 郵便箱 ニ入レテ置ケ（『五十日間』p. 145）

上に掲げた会話の用例や内容は，朝鮮語を学ぶに欠かせないと著者は判断した結果，彼の会話書に共通して登場するようになったのであろう。また「以上述ヘタル所ヲ了解シ其例ヲ記憶シ活用セラルトスレハ読者ハ已ニ一通リノ対話ハ差支ヘナカルヘキモ隴ヲ得テ蜀ヲ望ムハ人情ノ常ニシテ対話ノ自由ナルハ却テ不自由ナルカ如キ感アルヘシ因テ練習ノ為メ稍稿ナル会話ヲ掲ク」[*24] と記しているように，学習したことの活用や練習が重要であるという彼の考えが『新会話』を始め，彼の会話書作りにも一貫して反映しているものと考えられる。

5．対訳について

島井は，朝鮮人のために朝鮮語の記述を別途に設けるほどの高度の語学力を持っており，会話や本文における朝鮮語対訳もかなり正確度の高いものといえる。朝鮮語の言い方も日本語と同様，相当教養のある言い方になっている。それは，島井が接した人々が教養ある階層で[*25]，彼らの言葉遣いを直接学習し，それを本書に記述していたためと推察される。ここでは，その朝鮮語との関連づけて，訳語としての日本語についてみることとする。

（1）意訳

島井は，注意書きに「訳語ハ直訳ヲ避ケ勉メテ其意ヲ失ハサランコトヲ注意シタリ（中略）編纂ニ当テ或ハ日語ヲ韓訳シ又ハ韓語ヲ日訳セシヲ以テ随テ一方婉曲ノ語アルヲ免レズ」と記し，自然な日本語の対訳を目指していることを明らかにしている。

①アスペクトの差異

両国語の動詞のアスペクトには微妙な差があり，次のように「食ベテイマス」という進行形を「먹슴늬다（タベマシタ）」という完了形に表したり，「考エテイマシタ」を「싱각후엿소（考えました）」に，「忘レテキマシタ」を「아조니져버렷구려（忘れてしまいました）」に訳している。

タベテ、イマス　먹슴늬다（モクスムニダ, p. 29）
コチラニ来(キ)ツヽ　考(カンガエ)テイマシタ　이리 오면셔、무음에　싱각후엿소（イリオメンソマウーメセンガクハヨツソ, p. 41）
全(マツタ)ク忘レテキマシタ　아조니져버렷구려（アヂヨイヂヨポリヨツクリヨ, p. 157）

②婉曲な表現

義務・当為表現である「～ネバナラナイ」が「후여야후지（～した方がいい）」に，可能の「～（ラ）レナイ」が「기어렵소（~し難い）」に，「～（ラ）レソウ」が「원망후기쉽소（～されやすい）」になるなど，和らげや婉曲な表現を用いている。また，「欲ナコトヲ云ナ」が「욕심뉘지마라（欲張るな）」と間接的な表現になっている。

ツヽシマネバナリマセヌ　조심후여야후지（チヨーシムハヨヤハチ, p. 38）
独(ヒト)リデハ受合(ウケヤワ)レナイデス　혼자담당후기어렵소（ホンヂヤタムダグハキオリヨプソ, p. 133）
何デモ恨(ウラマ)レソーデス　원망후기쉽소（ウオンマグハキシプソ, p. 155）
欲(ヨク)ナコトヲ云(イウ)ナ　욕심뉘지마라（ヨクシムネーチマラ, p. 111）

③四字熟語・慣用句など

「뵉골난망（白骨難忘）」・「일구난셜（一口難説）」は各々「死して白骨に化しても恩を忘れがたい」「一言では到底説明しにくいこと」の意味で，それが「ゴ恩ハ死デモ忘レマセヌ」「一口ニ言レナイデス」に訳されている。「사롬죽깃네」は，直訳すれば「人が死にそう」であるが，「堪えられないくらいたいへんである」の意味として慣用的に用いられる言葉である。これを次のように訳されており，自然な日本語訳であるといえる。

ゴ恩ハ死デモ忘レマセヌ　은혜는뵉골난망이요（ウンヘーヌンペクコルナンマギーヨ, p. 155）[*26]
一口(ヒトクチ)ニ言(イワ)レナイデス　일구난셜이요（イルクーナンソーリヨ, p. 164）
盛自列(ジレツ)タク堪(タエ)ラレナイデス　갑히셔,사롬죽깃네（カプハイソサラムチユク

ケンネ, p. 236)

（2）誤訳

語彙の意味を誤解しているためか，次のような誤訳の用例が見受けられる。用例の「천천이」は「ゆっくり」，そして「다락」は「屋根裏べや」の意味である。

静(シズカ)ニ往カレヨ　천천이가시요（チョンチョンニカシヨ, p. 93）
夏ノ日ニハ、コンナ二階ガ結構デスネー　녀름이며는이런다락이둣캣소（ヨルミーミヨヌンイロンターラキーチョツケツソ, p. 175）

島井は，「ゆっくり」と「静かに」の意味を逆に理解していたようで，本書55ページの単語に「좋용이 チョーヨギ」を「ユツクリ」と記している。つまり，「천천이가시요」は，「ゆっくり往かれよ」になるはずのところが，ここでは「静(シズカ)ニ往カレヨ」になっている。

また，文章全体が間違っている場合もある。つまり，「뷔가불너아무것도목먹깃소이다」は，「お腹がいっぱいなので何も食べられません」という意味であるのに，次のような対訳となっている。

腹ガ太ツテ何ニモヤレマセヌ　뷔가불너아무것도목먹깃소이다（ペーカプルロアムコツトモンモツケツソイダ, p. 102）

（3）不自然な日本語

朝鮮語の影響で，不自然な日本語が見られるのも事実である。例えば，「눅이나오」が「サビガ出ル」に，「한심훈」が「寒心ナ」に，「모긔가침노ᄒᆞ면」が「蚊ガ侵セバ」になっているが，実は，各々「錆付ク」「情けない」「蚊に刺サレバ」になるべきところなのである。「寒心」の場合は，朝鮮語の漢字読みをそのまま記されたものであるが，日本語と朝鮮語の意味のずれは大きい。その用例を示すと次の通りである。

手ヲ当ルト錆ガ出マス　손다히면눅이나오（ソンタヒメンノキーナオ, p. 143）
実ニ寒心セズニヰラレマシヨーカ　참한심훈일이요（チヤムハンシムハンニーリヨ, p. 160）
蚊ガ侵セバ眠ラレナイデ翌日大変ツカレマス　모긔가침노ᄒᆞ면줌을못자고,잇튼날미우곤ᄒᆞ오（モキカチムノハメンチヤームルモツチヤコイツツンナルメーウコンハオ, p. 166）

日本語と朝鮮語の対訳を見比べてみると，その編集にあたっては，朝鮮語の会話が先に組み立てられ，それを日本語に訳して成立したものではないかと思われる。従って，注意すべきところは，対訳の日本語においては，洋学資料と同様，両言語のずれや翻訳による日本語の不自然さが見られる点である。

6．日本語のハングル表記

本書では，「発音ハ仮名ヲ附シテ初学者ノ独習ニ便スト雖モ成ルヘク韓人ニ接シ実地ニ活用シテ其音ヲ正サレンコトヲ希望ス」と述べ，朝鮮の人の日本語の学習のために[27]「五十音図」を片仮名で，「伊呂波」を平仮名で記しており，下にその発音を表音文字であるハングルで示している。ここでは，『新会話』および当時の朝鮮語会話書において，ア行・ワ行，そして濁音がどのように表記されているかをみてみることとする。

ア아	イ이	ウ우	エ에	オ오
ワ와	ヰ의	ウ우	ヱ웨	ヲ워

ガ갸	ギ기	グ구	ゲ게	ゴ고
ザ쟈	ジ지	ズ즈	ゼ제	ゾ조
ダ댜	ヂ디	ヅ두	デ데	ド도
バ뱌	ビ비	ブ부	ベ베	ボ보
パ파	ピ피	プ푸	ペ페	ポ포

上の五十音図によれば，「イ이 (i)，ヰ의 (yi)」「エ에 (e)，ヱ웨 (we)」「オ오 (o)，ヲ워 (wou)」のように，片仮名の違いに対応してハングルの綴りが区別してなされている。なお，濁音については，有声摩擦音であることを表わすために，朝鮮にはない「ㄴ」を入れた新たな綴り方をしている。また，「ズ」は「즈 (zu)」，「ヅ」は「두 (du)」と表記されていて，その区別は保たれている様子である。

同じ明治39年に京城日語雑誌社から出版された『独習新案日韓対話』には，(平音) ア아 イ이 ウ우 エ에 オ오／ヤ야 イ이 ユ유 エ예 ヨ요／ワ와 ヰ위 ウ우 ヱ웨 ヲ워，(濁音) ガ갸 ギ기 グ구 ゲ게 ゴ고／ザ쟈 ジ지(지) ズ즈 ゼ제 ゾ조／ダ댜 ヂ디 ヅ두 デ데 ド도／バ뱌 ビ비 ブ부 ベ베 ボ보，(重濁音) パ파 ピ피 プ푸 ペ페 ポ포 と示してある。ここでは，「ヰヱヲ」については，「ヰヱヲ」の本来の音は「위 (wi)・웨 (we)・워(wou)」であるが，実際には「이(i)・에(e)・오(o)」と発音するとし，濁音をハングルで正確に表わすには極めて困難であることを付け加えている。「갸」という表記についても喉の奥で発声するものとしている。つまり，提示し

た五十音図のハングル表記と実際の発音が異なることについて解説を付け加えているのである。

島井の『日語会話』にも，五十音の発音をハングルで表している。これについて，「日語濁音「ガギグゲゴ」を「ㄱㅏㅇ　ㄱㅣㅇ　ㄱㅜㅇ　ㄱㅔㅇ　ㄱㅗㅇ」と記しているが，それが完全に日本音と一致するものではなく，近似しているだけである。従って，本文中には「ガ」を「가・ga」に，「ギ」を「기・gi」に記したところが少なくない。なお，「ツ」が「주・zu」でもなく「두・du」の発音でもないが，一致する文字がハングルに存在しないため，ある個所では「두」，ある個所では「주」と掲出している。練習しか道がないと思う。（筆者訳）」とハングルでの日本語音の正確な表記がいかにも困難なものであるかについて述べている。

7．終わりに

明治39年刊『日韓韓日新会話』は，島井浩により編纂された日本人のための朝鮮語会話書であると同時に朝鮮人のための日本語学習書でもあり，日常必要とする語彙を集めた「単語部」と実用対話が綴られている「会話部」が交互に置かれている。単語の部立ては，島井の他の会話書と一致するが，掲載された語彙は新たなものに入れ替えられており，時代を反映している。会話は大体が丁寧で改まった言い方である。

漢字の振り仮名・表記・対訳・語法などから，当時の日本語の様相が窺われる。ところが，本資料を扱うには，対訳の日本語における誤訳や不自然さおよびハングルによる日本語の発音表記については注意を要する。いずれにしても，『日韓韓日新会話』は，近代語の一面が知られる，近代日本語研究における有益な資料と見なすことができる。

［注］

*1 当時の国名は「大韓帝国」でその言葉は「韓語」であるため，「韓語会話書」が正しい名称であるが，便宜上「朝鮮語」・「朝鮮語会話書」とした。

*2 「注意」書きに記している。

*3 「ㄱㄴㄷ」のような子音を父音にし，「ㅏㅑ　ㅓㅕ」は母音に，子音と母音の組合せである「가갸거겨」を子音としている。また，その組合せの音図は 99音（ㄱ～ㅎ，平音）/11音（ㅎ，軽音）/44音（ㄲ～ㅊ，激音）/20音（ㄳ～ㅄ，重音）/8音（ㅆ，重激音）から成っている。

*4 本文は右から起筆する縦書きの表記形式を取っており，ハングルの読みは片仮名で右側に振られているが，本稿では，例文の引用を横書きにし，ハングルの読み方は括弧の中に示す。

*5 朝鮮人向けの「注意」書きには，文法は初学者にとっては学びにくく本書では掲げないので，文法の学習を希望する者は，日本俗語文典を熟読することを勧めている。

*6 『日韓韓日新会話』に寄せた序文には，「大韓国湖西二素堂居士成斗植謹識」とある。

*7 本名は金島治三郎。『日韓会話三十日間速成』（明治37）・『韓語教科書』（明治38）・『対訳日韓新会

話』（明治38）・『日韓会話捷径』（明治38）・『日韓言語合璧』（明治39）・『独修自在日語捷径』（明治38）の著書がある。

*8 この表に記した5冊以外に『朝鮮語五十日間独修』（大正8）がある。

*9 朝鮮人向けのところには朝鮮語で解説を、日本人向けのところは日本語で解説をしている。当時の朝鮮における開港場・鉄道・貿易などのテーマの会話が示されている。たとえば，「開港場ガ何ケ所有マスカ・沢山有マスガ盛ナノハ矢張仁川釜山元山デス／京城ハ人口ガドノ位デスカ・精ハ知ラナイデスガ凡ソ二十万位デシヨウ／電気鉄道モ有ソウデスナ・ハイ、米人ノ手デ布レマシタ／貴国ノ人参ハドコカラ重ニ出マスカ・人参デ尤モ有名ナノハ開城デス・砂金ノ産地ハドコデスカ・砂金ハ平安咸鏡二道ガ重デス」という具合である。

*10『日語会話』序に，「最近，日本語を学ぼうとする人が増えているが，適当な教材がないため，日本人のための韓語学習書で日本語を学習している。朝鮮には，友達が多いが，その友達の子供たちが日本語学習のために，私にその教材の編纂を求めるので，本書を編纂することにしたのである」（筆者訳）とある。

*11 ソン（2008）参照。

*12 『韓語学』と『五十日間』には，単語が巻末に附録として付けられているが，『独学』は巻頭にある。

*13 日露戦争で日本がロシアに勝ったため，朝鮮や満州の植民地化が確実なものなったのである。

*14 朝鮮語の対訳は省略する。

*15 『実用』に，十（ジウ）・一百（イツピャク）・七百（シチヒャク）・九百（クヒャク）・九倍(クバイ)・四番目（ヨバンメ）という用例がみられる。(『実用』pp. 6～7）

*16 『韓語学』には，「杖」（p. 199）となっている。

*17 朝鮮語は基本的には読点などをつけていないが，部分的に分ち書きがなされているところもある。例えば，「勉強（ベンキョー） スレバ、キヽメガアリマス　힘을쓰면 그 효험이 엇지 업스리오（ヒームルスメン　ク　ヒョーホミ　ヲツチ　オプスリヨ)」(p. 42）のようなものである。

*18 日露戦争は，明治37～38年（1904～05）にかけて日本と帝政ロシアとが満州・朝鮮の制覇を争った戦争である。明治37年２月国交断絶以来，同年８月以降の旅順攻囲、明治38年３月の奉天大会戦，同年５月の日本海海戦などでの日本の勝利を経て同年９月アメリカの斡旋により講和条約が成立する。本書の会話では，「ドーシテ、日魯(ママ)間ニ戦争ガ起リマシタカ」という質問に対して，「其根本ハ久イコトデスカ元来魯国ガ、清国満州ノ地ヲ占領シテ清国ニ還付スベキ期限ガ過テモ与エザルノミナラズ朝鮮龍岩浦ヲ条約モ、セズ占領シテ誠ニ傍若無人ノフルマイヲシマシタカラ日本ガ魯国ニ対シテ談判ヲシマシタニグズグズシテ半年ノ月日ヲ過シ談判ノ結末ガ、ツカナイカラ、致方ナク開戦スル様ニナリマシタ」(p. 72）と戦争勃発の原因についての対話がある。

*19 「ユコウト思ツタニ行ナカツタデス（p. 47)・テンキガ晴テイタニ雨ガフリマシタ(p. 47)・酒ヲノンデイタニデンシンガキマシタ（p. 47)」のように，「ノ」を挿入していない用例が見ら

れる。

*20 会話六・七・八について，島井は，「会話六七八ノ三章ハ編者ガ韓語ヲ学ブノ際恩師ノ教授ヲ筆記セシモノ日訳ヲ加ヘテ本書ニ掲ケタリ」とその出処を明らかにしている。

*21 『韓語学』には，大体漢字に振り仮名がついているが，後半部の「働詞第六」の会話の部分には振られていない。

*22 『韓語学』の会話は，「会話第一初対面・会話第二久濶・会話第三飲食・会話第四訪問・会話第五船中・会話第六宿屋・会話第七人夫・会話第八勉強・会話第九商売・会話第十四時・普通の会話」から成っており，島井の他の会話書の土台をなしているものである。

*23 『五十日間』は，会話のやり取りではなく，一日に学習する会話の用例文が示されている。島井が著述した会話書の中では，レベルが最も高く，前半は比較的簡単でやさしい文章が，中盤は前半より難しく，長さも若干長くなる。後半には，難易度の高い２行から４行の長文が記されている。『新会話』と共通する文章は，中盤以降には出てこない。

*24 『実用韓語学』の会話例には，当時の貿易ノ実状が現れている。(pp. 186～188) 朝鮮の人の「如何ナル品物ヲ持テ来ラレマシタカ売レ易イ品物ヲ持テ来マシタ、品物ノ名ヲ云ヒマスカラ御聞下サイ」の要請に対して，日本人は「西洋木洋紗、和羅、毛織、班布、洋糸、各種絹織、沙器、沙鉢、大皿、皿、杯、 酒煎、花瓶、花盆、硯滴、等物、銅ニテ作リタル酒煎子、金網、鋳鉄釜、正鉄鍋、洋鉄手水盥、 刀、銃、鉛、含錫、直鍮、白銅、石油、手水石鹸、洗濯石鹸、洋傘、雨傘、各色、上衣、下衣、単 衣シタギ、足袋、靴、オビ、足紐、被ムル笠、眼鏡、度アル眼鏡、度ナシノ眼鏡等」と述べ，「ソノ品物ヲ売レバ朝鮮ノ品物ハ何物ヲ持テ往カレマスカ」という質問には，「朝鮮ノ品物ハ， 金、銀、山参、鹿茸、虎皮、豹皮、各色皮物、白木、北布、明細等、海参、北魚、鯨、鱸魚、鯛、 鯉魚、甘旧、海衣等、白米、糯、小麦、大麦、大豆、小豆、緑豆、等ヲ買テ往ク積リデスカラヨク 買テ下サイ」と述べており，当時の貿易の品々の明細が掲げられている。

*25 『実用』は，京城の李冕稙・陳熙星・趙熙舜閲，『新会話』も成斗植の校閲を経るなど，朝鮮の学士が朝鮮語部分をみている。

*26 『速成独学朝鮮日本会話篇』(明27)にも，朝鮮語を直訳した日本語の例が見受けられる。「其言葉ハ。誠ニ。野俗デス クー、マルスームン。チユグマル。ヤーソク、ホーワーヨ（p.57)・白骨。難忘デゴザル ペクコル。ナンマグ、イロセータ（p.62)」

*27 島井は，『実用』にも五十音を掲げているが，それは朝鮮人のためのものではなく，「朝鮮電信ノ用ニハ此表ニ因テ自由ニ邦語ヲ彼ノ局ニ依頼スルコトヲ得ルノ便アル」とあり，日本人が電報を打つために便宜を計ったものとして掲載したたものである。

［参考文献］

梶井陟（1978)「朝鮮語学習書の変遷」(『季刊三千里』第16号)

久保田優子（2005)『植民地朝鮮の日本語教育』九州大学出版会

櫻井義之（1974)「日本人の朝鮮語学研究(一）～（二）」(『韓』第７号～第８号)

成玧姸（2008）「日本語資料としての朝鮮語会話書〔明治前期〕」（『日本語の研究』第４巻２号）
田中章夫（2002）『近代日本語の語彙と語法』東京堂出版
濱田敦（1970）『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店
松村明（1970）「羅尼著『和法会話対訳』について」（『洋学資料と近代日本語の研究』所収）東京堂出版
山田寛人（2004）『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策』不二出版
由良君美（1983）「名訳と誤訳の接点」（『言語生活』第384号）

（ソン　ユンア　大学院人文社会系研究科　博士課程）